



Data

監督：イリヤ・フルジャンovski
／エカテリーナ・エルテリ

出演：ナターリヤ・ベレジナヤ／オリガ・シカバルニヤ／ウラジール・アジッポ／リュック・ビジェ／アレクセイ・プリノフ

👁️👁️ みどころ

ソ連邦時代の『戦争と平和』4部作(65年～67年)も壮大だったが、“DAUプロジェクト”のバカでかさは想定外！プーチン大統領のあまりに長い任期と同様、ソ連邦(ロシア)のやり方はある意味ハチャメチャだ。DAUとは?“DAUプロジェクト”とは？

『戦争と平和』のナターシャは“理想の女性”だったが、本作のナターシャは？第70回ベルリン国際映画祭で銀熊賞を受賞した本作は“DAUプロジェクト”で作られる全16作の第1弾だが、“ソ連全体主義”の社会を“完全再現”した“狂気のプロジェクト”の中で、ナターシャはどんな役割を？

過激な性描写には『愛のコリーダ』(76年)との対比でも興味津津だが、プーチンが大学卒業後、最初に就職したソヴィエト国家保安委員会(KGB)は、1950年代どんな役割を？その尋問風景は如何に？

鑑賞後は疲れがどっと出ること間違いなしだが、あと15作、あなたはいつ、どう観る？

—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*

■□■ “DAU”ってナニ？ “DAUプロジェクト”とは？ ■□■

本作のパンフレットには旧ソビエト連邦の大地図が載せられている上、ロシア語の記事もちらほら。そして、そのイントロダクションには次のとおり書かれている。すなわち

オーディション人数39.2万人、衣装4万着、欧州最大1万2千平米のセット、主要キャスト400人、エキストラ1万人、制作年数15年……

「ソ連全体主義」の社会を完全再現した狂気のプロジェクト！

また、チラシには“ソ連全体主義”の社会を現代に蘇らせる”“前代未聞の手法で人間の本質に迫る、狂気のプロジェクト！”の文字が躍っている。

本作のタイトルにされている“DAU”とは一体ナニ？それは、「1962年にノーベル物理学賞を受賞したロシアの物理学者、レフ・ランダウからとられている」そうだ。「彼はアインシュタインやシュレーディンガーと並び称されるほどの優秀な学者であると同時に、スターリンが最高指導者を務めた全体主義時代において、自由恋愛を信奉し、スターリニズムを批判した罪で逮捕された経歴を持つ」そうだ。しかし、「ロシアの奇才イリヤ・フルジャノフスキー監督は、処女作『4』が各国の映画祭で絶賛を浴びると、ソ連時代に生きた物理学者レフ・ランダウの伝記映画に着手したが、それは次第にいまや忘れられつつある「ソヴィエト連邦」の記憶を呼び起こすために『ソ連全体主義』の社会を完全に再現するという前代未聞かつ壮大なスケールのプロジェクトに発展」したそうだ。

それが“DAUプロジェクト”だが、それが「史上最も狂った映画撮影」と称されているのは一体ナニ？それは本作を鑑賞する中でじつくりと・・・。

■□■ナターシャは“あの名作”のヒロインと同じ名前だが■□■

他方、同じくタイトルになっている“ナターシャ”は、“DAUプロジェクト”に約2年間参加し、現実に理工学研究所のカフェでウェイトレスとして働いていたナターリヤ・ベレジナヤの役名。“DAUプロジェクト”は1938年から1968年までのソ連邦の動きを再現するものだが、ナターシャは1907年生まれ、1942年からカフェのリーダーとして働き始めるという設定にされている。そのナターシャ役を“DAUプロジェクト”に参加した1972年生まれの素人女優(?)ナターリヤ・ベレジナヤが演じているわけだが、そんなヒロインはもちろんはじめて。

ロシア(ソ連)で“ナターシャ”と聞けば、誰でもトルストイの長編小説『戦争と平和』のヒロインを思い浮かべるはず。私はオードリー・ヘプバーンがナターシャ役を演じたハリウッド版の『戦争と平和』(56年)を10回近く観る中で、“ナターシャは理想の女性”というイメージができて上がっている。また、当時“これぞソ連映画!”と、今回の“DAUプロジェクト”と同じように、世界をあっと驚かせる規模の中でソ連が完成させた『戦争と平和』4部作(65年～67年)では、リュドミラ・サバーリエワがナターシャ役を演じていたが、これも信じられないような可憐さで、オードリー・ヘプバーンに勝るとも劣らないナターシャ像を表現していた。また、ソ連版『戦争と平和』4部作では、「アウステルリッツの戦い」と「ボロジノの戦い」の物凄さに、ただただ圧倒されたものだ。そんなわけで、ロシア(ソ連)映画でナターシャと聞けば、すぐにそんな理想の女性像を思い浮かべてしまうが、さて本作のナターシャは・・・?

ちなみに、本作は第70回ベルリン国際映画祭で銀熊賞(芸術貢献賞)を受賞したが、同時に第2弾である『DAU.Degeneratioon(原題)』も出品され、こちらは同じベルリン映画祭のコンペ外で上映されている。“DAUプロジェクト”では今後全部で16本の映画を公開するそうだが、そこでナターシャはどれくらい出演?

■□■ “ソ連全体主義” とは？その社会の “完全再現” とは？ ■□■

本作のパンフレットにある“INTERVIEW”で、イリヤ・フルジャノフスキー監督は、「すでに700時間の撮影済みのフィルムがあると聞いていますが、何本くらいの映画を世に出す予定なのでしょう。また、そのテーマは何ですか？」との質問に対し、「16本は制作する予定です。いくつかは既に編集集中です。映画のテーマですが、人間の本质をその人生、時の流れ、空間を用いてさまざまなカタチで描きたいと思っています、つまり、そこで起こったことをさまざまな視点から眺めるということです」と答えている。

本作が「狂気のプロジェクト！史上最も狂った映画撮影」と言われているのは、“DAUプロジェクト”によって“ソ連全体主義”の社会を完全再現しようとしたこと。“DAUプロジェクト”で再現しようとしたのは1938年から1968年までの“ソ連全体主義社会”だが、その30年間に“ソ連全体主義社会”はどのような展開を？

ナチス・ドイツによる1939年9月のポーランド侵攻によって第二次世界大戦がはじまったが、ナチス・ドイツのソ連への侵攻は1941年6月。当時のソ連の指導者はスターリンだ。彼は第二次世界大戦後の“世界の分捕り合戦”の絵を、米国のルーズベルト、英国のチャーチルと共に描いていたが、そのスターリンは1953年3月に死亡。その跡を継いだニキータ・フルシチョフは“スターリン批判”を展開してスターリン体制からの決別を目指したが、その後の“米ソ冷戦時代”を含む、1968年までの“ソ連全体主義”の実態とは？

イリヤ・フルジャノフスキー監督は壮大な“DAUプロジェクト”展開の中で、主要キャスト400名を現実にも物理工学研究所の中で生活させ、その姿を必要に応じて撮影したり。そして、本作と『DAU.Degeneratiioon (原題)』を含め、計16本の映画を公開する予定だというから、いやはやすごい。たまたま(?)、その“DAUプロジェクト”公開の第1弾が本作になったわけだが、さあ、第70回ベルリン国際映画祭で銀熊賞(芸術貢献賞)を受賞した『DAU. ナターシャ』とは一体どんな映画？

■□■ スタートは、女同士の “対決” から！ ■□■

本作冒頭は1952年。ソ連邦物理工学研究所のカフェが舞台だ。カフェの責任者であるナターシャは、若いウェイトレスのオーリヤ(オリガ・シカバルニヤ)を使いながら働いていたが、店の客筋のほとんどは秘密実験に携わっている多くの科学者たち。あの時代のソ連の料理や酒がどんなものか私は全然知らないが、客たちは殆ど常連客らしいし、店の料理にも雰囲気にも十分満足しているようだ。

カフェの経営はどうなっているの？資本主義体制で育った私はすぐにそんなことを考えてしまうが、それは本作では全くわからないし、イリヤ・フルジャノフスキー監督もそれには全く興味がならしい。そして、客が帰った後、ナターシャがオーリヤと語り合うシークエンスを観ていると、イリヤ・フルジャノフスキー監督の関心はどうも“愛の姿”にあるようだ。40代のナターシャと、医者の娘でまだ20代のオーリヤは、男性経験にお

いても、お肌のハリや美しさにおいても違うのが当然だが、なぜナターシャは「あんたは、まだ愛を経験したことがない」とオーリヤのことをバカにするの？ひょっとして、それは嫉妬の裏返し？そこらがよくわからないまま、半分酔っ払い状態の女2人の会話（口喧嘩？）はあらぬ方向（？）に進み、ついには取っ組み合いのけんかになってしまうから、アレレ・・・これって一体ナニ？これにて2人の女の関係はジ・エンド・・・？

■□■過激な性描写は如何に？その過激度は？■□■

来る4月30日からは大島渚監督の『愛のコリーダ 修復版』（76年）が公開される。「阿部定事件」をテーマにした同作は過激な性描写が注目され、裁判にもなったが、『愛のコリーダ完全ノーカット版』でのそれは如何に？それとの対比においても、本作中盤に描かれるナターシャとフランス人科学者・リュック（リュック・ビジェ）の“過激な性描写”は見ものだが、さて、その過激度は如何に？

物理工学研究所における科学者たちの研究は現実に行われ、その研究成果も発表されているそうだが、本作で登場するシークエンスはそれが成功した後のパーティらしい。その主催者がなぜオーリヤなのかはわからないが、その規模はかなりでかい。そんなパーティに、多くの科学者たちの顔なじみであるカフェの店長・ナターシャが招かれたのはある意味当然だが、そのパーティの席でロシア語と英語をちゃんぼんしながら、リュックとナターシャが仲良くなっていくシークエンスは興味深い。もっとも、私はそれはあくまでもパーティの上でのストーリーであり、まさかその延長として2人のベッドインまで行き着くことにビックリ！しかも、そのことはオーリヤも同意の上らしいが、2人がベッドインに及ぶのは一体どの場所？どのベッド？

■□■国家保安委員会の尋問は？その威力は？実態は？■□■

本作がどんな風にストーリー展開していくのかはサッパリ知らなかったが、本作中盤のハイライトは、リュックと一夜を共にしたナターシャが、ソヴィエト国家保安委員会（KGB）の犯罪捜査の上級役員たるウラジーミル・アジッポ（ウラジーミル・アジッポ）から尋問を受けるシークエンスになる。

2000年にボリス・エリツィンの後を継いで第2代ロシア連邦大統領に就任したウラジミール・プーチンは、1975年にレニングラード大学法学部を卒業した後、すぐにKGBに就職し、さまざまな謀報活動に従事したらしい。プーチンがKGBでの仕事を開始した1975年という時期は、私が弁護士として活動を開始した1974年とほぼ重なるが、それは1952年生まれの彼が1949年生まれの私とほぼ同世代だから当然のことだ。プーチンが1975年からスタートしたKGBの一員としての役割は知る由もないが、本作のアジッポを見ていると、1952年当時のソ連のKGBが物理工学研究所において、いかなる役割を果たしていたのかがはっきりと見えてくる。

研究所内では、秘密実験とはいえ自由な科学研究の中ではじめて新たな研究成果が得られるはずだが、今アジッポがナターシャを尋問しているのは、ナターシャが外国人研究者

と寝たこと。なぜ、それが悪いことなの？西側の人間である私にはそれ自体がさっぱりわからないが、本作に見る尋問風景は静かだが、迫力がある。『笑の大学』（04年）『シネマ6』（249頁）で観た検閲官・向坂（役所広司）による劇作家・椿（稲垣吾郎）への尋問は、それなりに迫力があつたが同時にユーモアたっぷりだった。しかし、本作を観ていると、当初は優しく尋問に入ったアジッポは、途中からナターシャを別室に連れて行き、素っ裸にひん剥いたうえ、あれやこれやの心理的圧迫や身体的圧迫を……。この尋問でアジッポがナターシャに“自白”を求めたのは、前述の通り、ナターシャが外国人研究者とベッドを共にしたことだが、それに続いてアジッポがナターシャに求めたのは、リュックのスパイとして告発すること。日本の刑事事件でも、「被疑者の自白調書」は取調官（刑事や検事）の思うがままに作られることはさまざまな事件で明らかになっているが、KGBのベテラン捜査官・アジッポによるナターシャへの尋問風景を見ていると、次々とナターシャの手書きの調書が作成されていくからすごい。なるほど、これが1950年代のソヴィエト国家保安委員会（KGB）の実態なの！

■□■どっと疲れが！あと15作を、いつ観る？どう観る？■□■

日本では2001年4月に始まった小泉純一郎内閣がブレーンとして重宝した竹中平蔵氏の考え方に沿って「郵政民営化」改革が進んだが、それと同時に労働法制も大きく切り替わった。それが従来の“年功序列方式”に代わる、新たに自由な労働法制だ。それによって非正規労働が拡大し、富める者と貧しき者との格差が広がったとの批判も強いが、私はその路線に肯定的だ。そして、何よりもそんな批判が自由にできることこそが“民主主義国”たる日本の良いところだと実感！それは、本作を観ていても、カフェの責任者であるナターシャとその従業員に過ぎないオーリヤとの“労使関係”がさっぱりわからないからだ。本作導入部で2人が展開した取っ組み合いのけんかど、**「2度と顔を見たくない」との“捨てゼリブ”**を聞いていると、2度とこの2人が同じ職場で働くことはないと思ったのだが、いやはや、その実態は……？

それはともかく、どんなストーリーがどう展開していくのか全く見当がつかない本作は、息詰まるような尋問のシークエンスが終わると、再びこの2人がカフェの中で飲み食いしながら“話し合い”をしている風景になる。アジッポの尋問を終えたナターシャには新たな任務もありそうだが、それは今後どんな風に展開していくの？そんな興味もあるが、それ以前に、オーリヤはナターシャとリュックとの情事をすべて見聞しているし、逆にナターシャはオーリヤが意識を失うまでに酒におぼれた姿を十分に見聞しているから、今後、そんな風にお互いに何もかも知り合った2人の仲はどのように展開していくの？そんな目でスクリーンに映る2人の姿と会話を追っていると、突然スクリーンが暗くなり、本作はジ・エンドに……。そんな終わり方に、一方ではアレレと思いつつ、他方では、なるほど、なるほど……。

ちなみに、第2弾『DAU.Degeneratioon（原題）』はどんな物語で、ナターシャはどん

な役割を果たすの？さらに、“DAU プロジェクト”では計16本も公開されるそうだが、第2弾『DAU.Degeneratiioon (原題)』を含めて、あと15作を、あなたはいつどう観る？本作の鑑賞後、どっと疲れが出たのは当然だが、そんな興味も津々と・・・。

■□■ソ連崩壊30年の今、KGB 創始者の銅像の行方は？■□■

“DAU プロジェクト”で作られた16本の映画が描く“ソ連全体主義”の30年間は1938年から1968年までの30年間だが、2021年の今年は、ソ連邦大統領だったゴルバチョフが辞任し、ソビエト連邦最高会議でソ連邦解体を宣言した1991年12月から30周年になる。日本では2019年4月30日に平成の30年間が終わり、令和の時代に入ったが、ソ連邦の最後の30年間は平成の30年間とほぼ重なっている。前述した平成の30年間は、大きく①失われた10年、②小泉改革の10年、③不毛の政権交代とアベノミクスの10年、に分けられるが、ソ連邦最後の30年間も激動の30年間だった。

前述のように、プーチンは1975年に KGB に就職したが、本作で見るようにソ連邦時代の KGB は大活躍（暗躍？）していた。KGB の前身であった秘密警察組織をソ連草創期に創設したのはジェルジンスキー氏で、ロシアの首都・モスクワにある KGB (現連邦保安局) 本部前には、立派な彼の銅像が建てられていたらしい。しかし、1989年11月に東ドイツにおいてベルリンの壁が崩壊し、ソ連邦も解体に向かう中で、各地のレーニン像が取り壊されたのと同じように、このジェルジンスキー像も1991年8月に守旧派のクーデター失敗に歓喜した群衆によって引き倒され、ソ連が崩壊に向かう歴史的場面になったそう。その後、銅像は市内の公園に移設されていたが、2021年2月、プーチン氏がトップを務める愛国運動団体「全ロシア人民戦線」幹部の著名作家、プリレピン氏らがモスクワ市当局に再設置を請願した結果、市当局に政策提言を行うモスクワ社会評議会は、ジェルジンスキー像を元の場所に戻すか、同じ場所に中世ロシアの英雄ネフスキーの銅像を設置するかを問うオンライン住民投票の実施を決定した。そして、2月25、26日に行われた投票には32万人が参加し、ジェルジンスキー像への支持は45%、ネフスキー像は55%だったそう。

2021年3月23日付産経新聞の「ソ連崩壊30年」と題した連載記事はその詳細を報じ、その最後では、リベラル紙のノーバヤ・ガゼータが銅像の再設置問題について、「ロシアの歴史が停止し、30年前の地点へと国が逆戻りしていることを表している」と分析している。なるほど、なるほど。朝日新聞が見向きもしないこんな記事を産経新聞が報道してくれたことに感謝しつつ、上記を“DAU プロジェクト”の第1弾たる本作の評論の一部としたい。

2021 (令和3) 年3月24日記